

伊那 Valley Supporter 会 その展望

平澤 春樹 (高13回)

はじめに

私は伊那市の生まれですが、伊那市からJR飯田線で飯田高校に通いました。その後、大学を卒業して東京都住宅供給公社に勤めた後、不動産鑑定士となり、現在の株式会社都市開発研究所を創設し代表取締役を務めています。自宅は世田谷区にあり、伊那市の実家との2拠点生活を続けています。

伊那市で生まれ育った私は、嘗て幕末から明治にかけておよそ30年もの間伊那地域に根付いた漂泊の俳人・井上井月を敬愛する地元の方々に共鳴し、一般社団法人井上井月顕彰会(会長・北村皆雄氏)の副会長として活動しています。

井上井月顕彰会の活動を進める傍ら、伊那・駒ヶ根にとどまらず、飯田・下伊那を併せた、伊那谷という広い



●ひらさわ・はるき
伊那市出身。法政大学法学部卒業。東京都住宅供給公社を経て株式会社都市開発研究所を設立。一般社団法人井上井月顕彰会副会長兼事務局長。出版社の(株)プロGRESS社主。不動産鑑定士。

観点にたった「伊那 Valley Supporter 会」の設立を目指しています。

一般社団法人井上井月顕彰会の活動

井上井月は、越後長岡藩の藩士とされています。

井月が信州に足を踏み入れたのは、1848年頃で、現在の中野市でした。

その後、駒ヶ根や伊那を中心におよそ30年間に亘り、家も持たず漂泊の生活を続けていました。この間、俳句の指導や句集の出版で飯田を訪れています。

明治の初期年代には、伊那市には版木による出版技術や取次店がなかったものと推測されます。

井月が世に出たのは、高名な小説家芥川龍之介の強い推薦があったからです。

主治医をやっていた駒ヶ根出身の下島空谷(本名・勲)

が、1921（大正10）年に『井月の句集』として世に出したのです。

その後、伊那高等女学校（現伊那弥生ヶ丘高校）の先生として赴任してきた高津才次郎が、これを改定・増補して下島勲・高津才次郎編『漂泊の俳人井月全集』（1930＝昭和5年）を発刊しました。

近年になって『漂泊の俳人井月全集』は、井上井月顕彰会によって第5版まで増補改訂を重ねています。井月は、柘植義春の漫画「蒸発」（『無能の人』収録）のモデルにもなっており、フランスでも翻訳出版されています。

戦前の1938（昭和13）年現在の伊那市美鷲みすず小学校の先生を中心に郷土読みもの『井月さん』という本が書かれ、副読本として多くの生徒に読まれていました。

これを井上井月顕彰会では、俳句を世界遺産にする運動を続ける国際俳句協会と外務省の協力によって、英訳版『伊那の井月さん』を米国やフランス等150か国以上の大使館に送っています。

また、井上井月顕彰会の下伊那支部長であり、理事でもある唐木孝治氏（写真家）が、南信州新聞に連載する「足跡をたどる〜下伊那の井月〜」は、すでに142回を超えており、下伊那における井月の足跡が次第に明らかになってきています。

井上井月顕彰会はどの様に発足したか

飯田高校時代の友人故下平肇氏（高13回、元東映宣伝部長）が、飯田に帰郷しており、種田山頭火が慕った伊那の井上井月を巡るドキュメンタリー映画（ビバ山頭火大塚幹郎監督）の上映について、伊那市での上映会に協力してくれとの要請がありました。上映後開かれた懇親会で、大塚幹郎氏から「伊那の井月研究会は、四分五裂してきてまとまりがない。一本化したらどうか」との指摘を受けました。同上映会に参加していた故竹入弘元先生（井上井月研究の第一人者、飯田高校に昭和44年4月～50年3月まで国語教師として在職）に相談すると、（株）

協和の社長堀内功氏（井

上井月顕彰会初代会長）と打ち合わせ、社団法人化することに合意してくれました。同時に、伊那

北高校出身の映画監督である友人の北村皆雄氏（日本民俗映像学会会長、現井上井月顕彰会会長）に相談し、〴〵ほかいびと



「第10回井月忌の集い 俳句大会」の様子
＝2023年3月、東京・六番町

「伊那の井月」の映画化に着手しました。この映画は、フランス、ドイツ、オランダ等数か国で上映されましたが、大変好評でした。

この間伊那市では、「千両千両井月さんまつり」を9月に実施し、3月には東京で「井月忌の集い」を伊那の認知度を高めるとともに、句会の吟行などによる地域創生（エリアマネージメント）を目指して活動が続けていきます。

上伊那も下伊那もともと同一地域

三州街道は、中山道の脇往還であり、中馬で荷駄を運ぶ通商の道として、江戸時代から盛んに利用された道で、伊那街道と呼ばれていました。

伊那街道は関所が少なく、大量な荷駄運送にスピードの上がる街道でしたが、このことは同時に人の往来や情報が集積やスピードアップも意味します。

歴史的に見れば、伊那谷は一つの地域であったことがわかります。かつて飯島町に伊那県がおかれていたことはその証左です。

このような認識から、高校時代に伊那北高校と飯田高校の交歓会（昭和35〜38年の4年間実施）を提案した経緯があります。

伊那 Valley 映画祭の発足

井上井月顕彰会の活動の中で、天竜川水系やその支流などの流域文化には、共通性があり、民俗行事や風習等でも諏訪信仰の影響を受けているとの北村皆雄映画監督の提言があり、新たな文化活動として、井上井月顕彰会が中核となり、実行委員会形式で伊那 Valley 映画祭を開催することになりました。伊那食品工業(株)と顕彰会前会長であった故堀内功氏の(株)協和(化粧品 Tractor と自然食品の会社)の協賛を得て、3日間のドキュメンタリー映画を中心とする伊那 Valley 映画祭を毎年開催することができることとなりました。今年2023年は第5回を実施しました。

天竜川流域に残るお祭や民俗行事等の維持、発見、普及などとともに、交通インフラの整備は新たな文化や情報の宝庫となるとの認識のもとに、旧来の「伊那谷」でなく伊那 Valley 映画祭として新たな創造と文化の息吹を盛り込んだ、質の高い映画祭として継続させようとしています。



「第4回伊那 valley 映画祭」の会場前で。左端が筆者＝2022年11月、伊那市

伊那 Valley Supporter 会の設立とその構想

(1) 伊那 Valley Supporter 会の設立

一般社団法人井上井月顕彰会の活動や、伊那 Valley 映画祭の開催を続ける中で、多くの文化団体や演劇家、音楽家等との交流を深めてきました。

支援する市町村の財政事情も悪化しているので、命に別条のない文化関係予算は、年々減額される傾向にあります。たとえ文化活動に対する助成金があっても、文化事業を実施しようとすれば、必ず自己資金が必要となります。市民個人では賄いきれないので、このまま進行すれば伝統的な民俗行事も消えてゆくしかありません。そこで、市町村の領域を超えて、文化活動が可能となる機構や団体が必要となります。伊那 Valley 映画祭や俳句会だけでなく、様々な文化活動を行っている団体や個人を支援するため、基盤となる組織として一般社団法人伊那 Valley Supporter 会を設立中です。

(2) 設立の背景と財源

文化事業に関連する事業計画について市町村に個別に相談にゆくと、ほとんどの町村では総論は賛成です。しかし、予算化の段階になると、小学校の耐震補強や空調施設設備、あるいは下水道整備等が優先的に計画される

ために、ほとんど採択されません。

そこで、「ふるさと納税」を使って納税し、一定金額を文化事業に補助してもらうことが可能なことを実証してきました。また、近年ふるさと納税の企業版では、最大損金率90%損金処理できることが制度化されました。

伊那 Valley Supporter 会では、趣旨に賛同する多くの会員に入会してもらい、年額1万円の会費収入を活動資金とするとともに、多くの人から呼びかけて「ふるさと納税」を伊那 Valley の関連市町村にってもらうことによって、活動の源資を確保しようとするものです。

今後の活動

(1) 郷土研究誌「伊那」及び「伊那路」への支援

伊那 Valley には、全国的にも注目されている郷土研究誌があります。歴史的に貴重な役割を果たしてきた郷土誌も研究者の高齢化や会員減少によって衰退、廃刊になる可能性があります。これらの活動への支援も必要です。

(2) アニメ映像の国際的発信

この地域には早太郎伝説や孝行ザルの伝説など、多くの伝説や民話があります。これらの伝説や民話を短編アニメ映像化して、国際的に発信することによって、聖地巡礼など、地域創生を促進します。